カキ大苗利用による植え傷みの軽減

福島県総合センター果樹研究所栽培科

1　部門名

果樹ーカキー栽培

2　担当者

桑名篤・志村浩雄・額田光彦・斎藤祐一・安達義輝

3　要旨

カキの植え付けには、1年生苗をそのまま利用するより、1年または2年間養成した大苗を利用することにより、植え傷みが少なく、乾燥が著しい年でも生育が優れる。

(1) 植え付け1年目における苗の枯死は、1年生苗が最も多く、2年生苗は少なく3年生苗は認められなかった(図1)。

(2) 樹体生育を比較すると、幹周、樹高、樹幅いずれも、3年生苗が大きく、次いで2年生苗、1年生苗の順であり、植え傷みの影響の少ない大苗の利用が有利である(図2)。

(3) 植栽1年後の2年生樹と植栽2年後の2年生樹の樹体生育には差が認められず、1年間苗木を養成することによる生育の遅れは認められない(図3)。

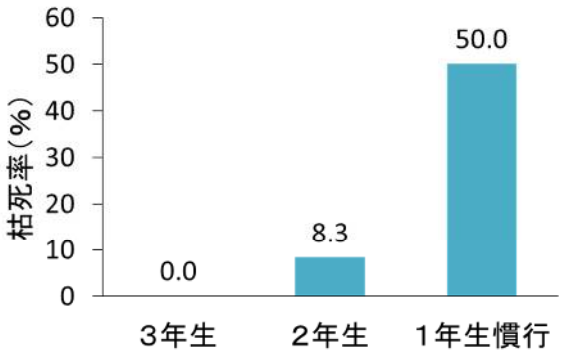

図1　植栽1年後における枯死率
※春先から降雨が少ない乾燥年の結果である。

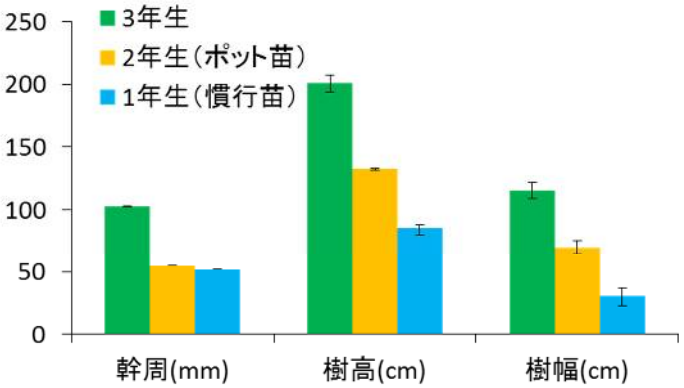

図2　苗木の種類と樹体生育(植栽1年後)

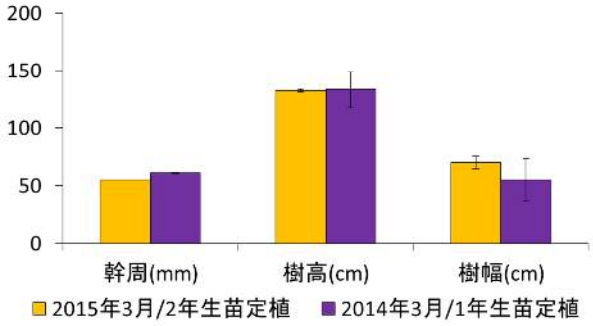

図3　植栽1年後の2年生樹と
植栽2年後の2年生樹の樹体生育

図4　植栽6か月後の3年生苗

4　成果を得た課題名

(1) 研究期間　平成25年度～27年度
(2) 研究課題名　持続的な果樹経営を可能とする生産技術の実証研究(先端プロ)
(3) 参考となる成果の区分　(発展見込)

5　主な参考文献・資料